Join us !

WELgee

難民とともに日本社会の未来を築く
WELgeeファミリーの一員になりませんか？

私たちの活動の特徴は、「支援」ではなく「個人個人の人生への中長期的な伴走」を行なっていることです。「中長期的な伴走」とは、個々の難民の方が日本社会と繋がるための取り組みであると同時に、日本社会が彼らと関係を築いていくための活動でもあります。

WELgee だけではなく、こういった価値観を体現する人が増えてゆくことで、社会は異なる背景を持つ様々な人たちがより生きやすいものになるはずです。生まれた国や人種、宗教などの境遇にかかわらず、どんな人でも一人の担い手として、未来を築くことができる社会を、私たちとともに実現しませんか。

WELgee ファミリーのご登録はこちらから

WELgee

所在地 〒150-6027
東京都渋谷区恵比寿 4丁目20-3 恵比寿ガーデンプレイスタワー 27階 デジサーチアンドアドバタイジング内「COEBI」

メール info@welgee.jp

SNS @welgee @WELgee_Japan WELgee（ウェルジー）@WELcome+refugee

理事 渡部カンコロンゴ清花 ／ 安齋 耀太 ／ 安西 翔平

監事 東樹 敏明 ／ 井上 智映子

職員 渡部カンコロンゴ清花 ／ 安齋耀太 ／ 山本菜奈 林 将平 ／ 玉利ドーラ ／ 渡辺 早希 島倉 愛理 ／ 坂下 裕基 ／ 武居 裕介

顧問弁護士 小野田 峻

顧問行政書士 長岡 由剛

写真 若井 智史

デザイン 平舩 瑞生

Co-Creative Adventure

WELgee

WELgee Annual Report 2019 - 2020

2019年度 活動報告書

みなさまへ
まだ4年、もう4年。
歩んできた月日を感じる瞬間の多い1年でした。

就職した仲間が後輩たちに向けた先輩セッションで語る側になったり、パパ・ママと来日し共に寝泊まりもした当時6才の女の子が母国の学校との違いを教えてくれるほど日本語が上達したり。一朝一夕では形にならないことが形作られてきました。組織にとっても、大きな気づきと変化がありました。事業の構築や拡大だけではなく、対話とコミュニケーションの構築にも時間を使いました。共通の目標を持っているからこそ、時には、実現方法や優先順位にすれ違い、ぶつかることがあります。異なる特性をもち、これまで異なる人生を歩んできたメンバーが、その多様性をどう活かしあえるのか。

「早く行きたければ、ひとりで行け。遠くまで行きたければ、みんなで行け」
アフリカのことわざです。ちょっとはみ出た多様性を活かし合い、迷いも葛藤も不安も共有できるチームに、また一歩、近づいたと思っています。

WELgee を支え、応援してくださっている皆さま、昨年のハイライトがぎゅっと詰まった一冊を手にとってくださってありがとうございます！　どうぞ、出会った当時のことを思い出しつつ読み進めていただけたら嬉しいです。

そして、WELgee を初めて知ってくださった皆さま。
WELgee の大きな仮説である「就労」を切り口に、企業も自治体も社会も難民も日本人も、お互いを活かし合う事例が積み上がってきたところです。みんなが当事者となって、様々なステークホルダーと築いた1つ1つの事例の先に、経済界・政界を巻き込んだルール・メイキングを視野に入れています。パートナーシップを大事にし社会をアップデートしてゆく。
この活動報告書が皆さんと共に未来を築けるきっかけになれば幸いです。

WELgee 代表　渡部 カンコロンゴ 清花

Contents

- WELgeeとは？ …… 02
- 2019年度のハイライト …… 03
- ストーリー（インタビュー記事） …… 05
- 2019年度の事業報告 …… 07
  - ・就労伴走事業
  - ・Tech-Up事業
  - ・TOKIWA事業・千葉ハウス事業
  - ・セミナー事業
  - ・サロン事業
- Team WELgee …… 14
- 寄付者の紹介 …… 15
- 協働事例の紹介 …… 16
- 財務報告 …… 17
- 2020年度のWELgee …… 18

WELgee = WELCOME + refugee

～難民の人々も歓迎できる社会に～

Vision　自らの境遇にかかわらず、ともに未来を築ける社会

Mission　志を発掘しつながりを広げ、未来をデザインできる仕掛けをつくる

Project　難民たちが自身のキャリアや人生の目標を追求できる道筋を、多様なセクターとの協働を通じて目指しています

ともに Talk WITH 語る

「難民と出会い語る」月に一度の対話型セッション（WELgee サロン）や、学校への出張授業、企業や地域団体への講演などを通し、難民の方々と気軽に関わることのできる機会を作っています。これらの事業を通じて、難民を社会の中で受け入れられる素地づくりを行います。「難民とともに」というキーワードを大切にし、コンテンツ作りや運営を協働して行っています。

セミナー事業……11P
サロン事業……13P

ともに Work WITH 働く

難民認定のみに頼らない方法で、難民たちが自身のキャリアや人生の目標を追求できる道筋を、民間セクターとの協働を通じて目指します。育成・採用・定着の一貫した伴走を行う、難民に特化した人材紹介サービス「JobCopass」や、プロのエンジニアとともに IT スキル修得の機会を難民の学習者に提供し、彼らのキャリアの実現に伴走をする「Tech-Up」を運営しています。

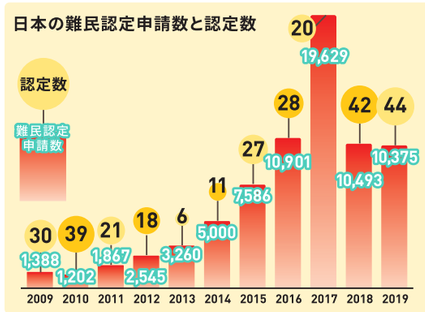
就労伴走事業……7P
Tech-Up事業……9P

ともに Live WITH 暮らす

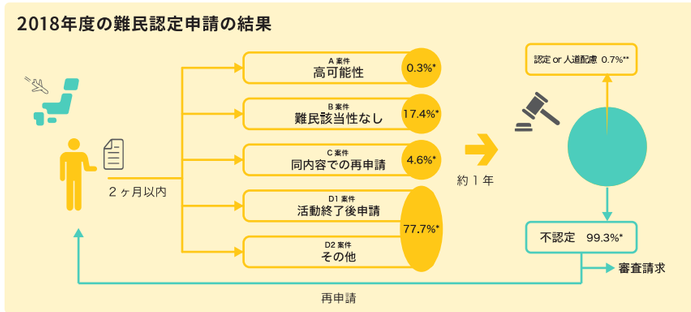
TOKIWA事業・千葉ハウス事業……10P

Issue　日本の難民問題

WELgee は日本にいる難民認定申請者の方々と活動しています。迫害等の恐怖があり故郷を離れざるを得ず、日本に逃れてきた人々は、政府に難民として認めてもらうための申請を行います。彼らの長期的かつ安定的な在留を可能にする唯一の公式の方法は、政府による難民認定ですが、長年にわたり認定率は 1% 以下にとどまっています。WELgee は、彼らが日本で法的安定性をもちつつキャリアや人生の目標を追求できるような道筋を模索しています。



出典：法務省



* 法務省『平成30年における難民認定者数等について』（最終閲覧日：2020 年 5 月 18 日）　** 一次審査での認定者 + 人道配慮を 2018 年度の申請数で割った値

2019 年度のハイライト

■ 集中して取り組む領域を少しずつ見極めていく年

2019 年度はこれまで数年間の多岐にわたる分野での試行錯誤から、集中して取り組む領域を少しずつ見極めてゆく年となりました。創業時から続けていた「ともに暮らす（Live WITH）」事業の継続を見直し、組織のリソースを、難民の方が就労というかたちで企業で活躍し法的地位を安定させる事例づくりに集約しました。その結果、行政書士や企業の協力の下、難民認定申請者の不安定な在留資格を、専門的・技術的分野の在留資格に変更することができました。

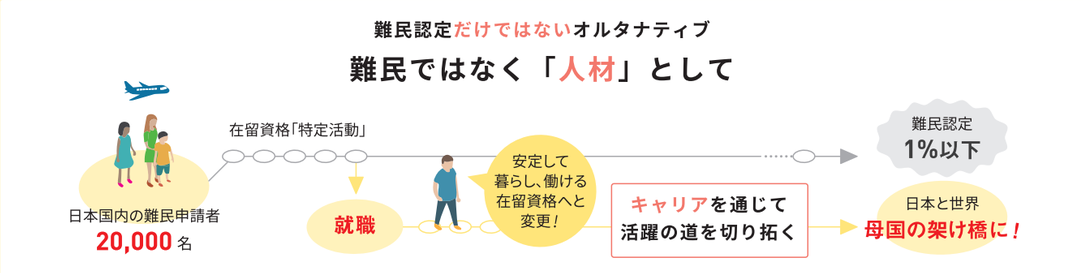
■ 数字で見る WELgee

- これまで繋がってき難民の数 …… 176 名
- 新しく繋がった難民の数 …… 30 名
- 新しく繋がった企業の数 …… 746 社
- 講演やイベントで接点を持った人数 …… 5,119 名
- 講演 / 研修実施団体 …… 67 団体
- メディア掲載 …… 27 件

Web	15 件	ラジオ	3 件
新聞	4 件	雑誌	2 件
TV	3 件		

1 ビジョン実現のための戦略

「自らの境遇にかかわらず、ともに未来を築ける社会」というビジョンの実現のため、難民として来日した者たちが未来をデザインできる状態にすることと、そのために企業とのパートナーシップを構築することを注力点に設定しました。「彼らの唯一の希望は、難民認定しかないのか？」── この問いのもと、難民認定申請に係る在留資格から就労を通じて専門的・技術的分野の在留資格に変更するという仮説を検証してきました。



「ともに暮らす（Live WITH）」の取り組みでは、地域社会のアクターとの協働に注力をしてきましたが、ビジョン実現のためのより効果的な方法として、経済界とのパートナーシップの構築を優先的に行っていくことにしました。結果的に、これまで不可能とも言われていた、難民認定申請者の在留資格を専門的・技術的分野のそれに変更する事例が実現しました。また、700 社以上の企業と接点をつくり、経済同友会や経団連などの経済団体との関係性も少しずつ生まれてきました。

ビジョンの具体化

ビジョン	自らの境遇にかかわらず、ともに未来を築ける社会
マイルストーン	庇護希望者（Asylum Seeker）と日本人がともに未来を築ける日本社会
条件 1	日本にいる庇護希望者が未来をデザインできること
条件 2	庇護希望者と日本人との間にパートナーシップが生まれること
方法 1	在留資格変更による法的安定性
方法 2	経済界における事例づくり

2 就労プログラム初の在留資格変更の事例

2019 年 10 月、行政書士・企業関係者の協力の下、難民認定申請者の不安定な在留資格を、安定して暮らし働ける在留資格へ変更する実例をつくることができました。在留資格とは、外国人が日本に在留するために必要な資格のことです。難民認定申請中の外国人に付与される在留資格は「特定活動」と呼ばれ、特定活動の在留資格を持つ認定申請者は、6 ヶ月毎の在留期間を更新し続けながら難民認定の結果を待ちます。彼らが日本に滞在できる根拠は、日本で難民認定申請をしていること。そのため、難民認定が降りなければ、在留資格を喪失してしまいます。他方、私たちは様々な難民認定申請者と接点を持つなかで、逆境を乗り越えた経験や異文化間の協働といった特筆すべき経験に加えて、高等教育を受けており、かつビジネス経験を持っている方々が少なくないことに気づきます。「難民認定申請者も、日本でホワイトカラーの職種に従事する外国人と同じ安定した在留資格を持つことができるのではないか？」── 最も変更の可能性が高い在留資格を「技術・人文知識・国際業務」に定め、仮説検証を始めました。在留資格の変更によって、当事者は先の見えない不安定な状況から脱却し将来を見通した生活を送れるようになり、採用企業は人材の維持や海外への派遣が可能になります。そして、日本社会も日本の産業を担う高度外国人材の活躍事例を作り出すことができます。今後は、在留資格変更の個々の事例を増やすだけではなく、こうした事例づくりを国の政策の後押しをもって進めていける状態を目指します。

3 パートナーシップの拡大・強化

2019 年度は、様々なアクターとのパートナーシップの強化を実現しました。
従来の難民支援は、弁護士や支援団体の関わる、専門的な領域だという認識がありました。しかし WELgee では、民間企業、公的機関、個々のビジネスパーソン、そして難民認定申請者たちとのパートナーシップを育み、経済界・政界を巻き込んだ政策づくりも視野に入れることで、政府による難民庇護のみに頼らない「オルタナティブパス」の創出に取り組んでいます。一例として、神奈川県と連携し、難民認定申請者の県立医療系大学院への進学と地域の総合病院での就職を実現しました。さらにコニカミノルタ（株）の協賛による漫画『「難しい民」ってなんだ』の増刷、（株）チェリオコーポレーションによる WELgee サロンへのドリンクの提供、（株）ジェイフィールや（同）こっからと連携した日系大手メーカー各社への企業研修の提供、また経済同友会・経団連・一流塾など企業経営陣の集う団体に向けた講演など、様々な協働が生まれています。（→ 詳しくは 16P へ）

4 組織基盤の強化

18 年度は 5 名の職員（うち 1 名はパートタイム）からなる体制で動いてきましたが、19 年度中に 1 名のフルタイム職員と 2 名のパートタイム職員が加わり、全部で 8 名の体制となりました。新たな職員の参画により、企業向け研修の事業化を本格的に行うこととなりました。

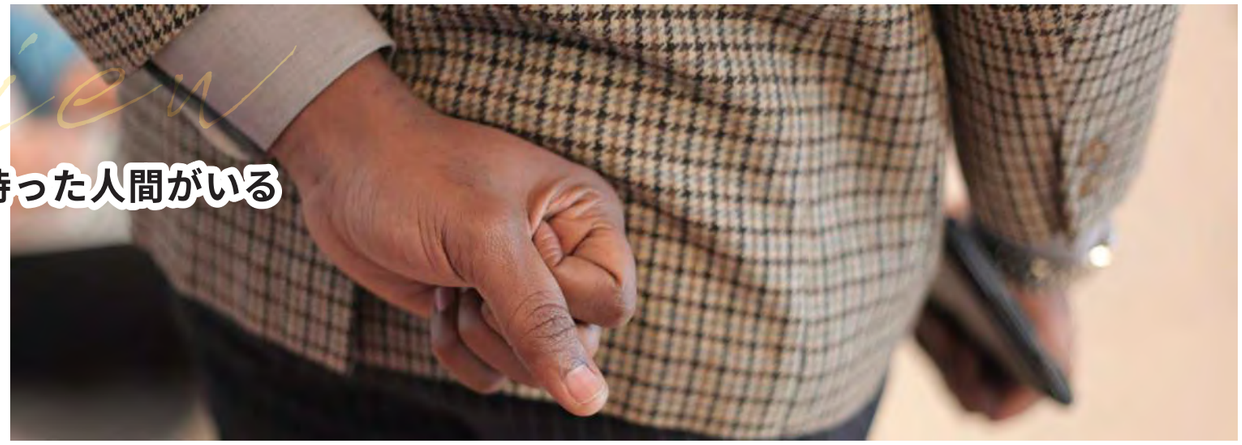
さらに、社会起業塾（※1）への参画と SVP 東京（※2）との協働を通じて、組織と事業の基盤強化を行いました。

（※1）社会起業塾とは、（特非）ETIC. が主催する、社会起業家の支援・連携を通じて社会イノベーション創出や戦略的社会貢献を推進するプログラムです。（※2）SVP 東京（正式名称：（特非）ソーシャルベンチャー・パートナーズ東京（以下、）は、社会的な課題の解決に取り組む革新的な事業に対して、資金の提供と、パートナーによる経営支援を行う団体です。

ことばを紡ぐ

難民という言葉の裏には、意志を持った人間がいる

故郷を逃れることは、これまで築いてきた人間関係、キャリア、財産、社会的地位、家族や親戚、友人、恋人と過ごす日常こと。私たちは難民として逃れた日本で、彼らが再び未来を築くことができる社会 ──「自らの境遇にかかわらず、ともに未来を築ける社会」を目指して活動をしています。そして今、そのビジョンの発芽となるような事例が日本で生まれつつあります。本コーナーでは元産婦人科医の M さんが様々な困難を乗り越え未来を切り拓く姿を紹介します。



Mさんの紹介

コンゴ民主共和国出身。電子機器に使用されるレアメタルを巡る鉱物紛争や独裁政権などにより傷ついた母国を、産婦人科医としてまた若者の政治参画を促す青年協会のメンバーとして立て直そうと奔走する中で迫害に遭い、2018 年 6 月来日。現在、神奈川県立の社会人大学院に通いながら、総合病院に勤務する。

日本に来た後のMさんの年表

2018 年 7 月 …… WELgee の運営していた緊急シェルターに入居
2018 年 8 月~ 2019 年 8 月 …… WELgee の行う講演や研修で登壇
2018 年 12 月 …… 小児科医・婦人科の現場を視察
2019 年 3 月 …… 緊急シェルターを卒業
2019 年 6 月 …… 神奈川県副知事首藤さんとの出会い
2020 年 4 月 …… 公衆衛生を学ぶ社会人大学院に入学・総合病院での勤務開始

2018 年初夏、私たちは M さんに出会った

私たちが M さんに出会ったのは、2018 年 7 月、都内の日本語教室だった。カトリックの系の支援団体が無償で開催する日本語教室には、母国での迫害から逃れ、来日して間もない人たちが集う。2016 年から、私たちは彼らにマンツーマンで日本語を教えるボランティアとして参加していた。M さんは日本にたどり着いてから 1 ヶ月間、人生で体験したことのないホームレス生活を送っていた。彼は当時の状況をこう振り返っている。

「たとえ学位を所持している私でも、日本の漢字は全く読むことができませんでした。宿泊できる場所もなかった私は、夜も街を歩き回って 1 ヶ月以上を費やしました……この時期は、私の人生で最悪の経験でした」

雨風しのげる家を探していた彼。当時私たちは難民の人たち向けの宿泊シェルター兼シェアハウスを都内で運営しており、彼を受け入れることになった。M さんと、彼と行動を共にしていた同国出身の難民認定申請者一人と、そして WELgee スタッフ3 名の共同生活が始まった。

難民となった時間を無駄にしたくはない

M さんが、私たちとの共同生活の中でよく口にしていた言葉がある。「難民となった時間を無駄に過ごしたくない」という言葉である。この発言の背景には、母国の未来への想い、産婦人科医としてそして若者の政治運動の幹部として活動をしていた経験がある。

母国で医科大学を卒業した M さんは、産婦人科医の研修医として 3 ヶ月間病院に勤務をした。彼が勤務した病院は、2018 年にノーベル平和賞を受賞したデニス・ムクウェゲ氏の活動する病院と同じ地域で「鉱物紛争」の犠牲になった女性を治療していた。

コンゴ民主共和国では第二次世界大戦以降、最多の犠牲者を生み出している紛争が今なお続いている。紛争の理由は、同国が豊富な希少金属（レアメタル）に恵まれていることに起因している。レアメタルは、パソコンやスマートフォンなど電子機器の製造に不可欠な素材であり、これを資金源とする武装勢力の衝突、いわゆる「鉱物紛争」が、世界最大の避難民を生み出す原因の 1 つとなっている。
それだけではなく、植民地支配時から続く武装闘争、外国軍の侵略、国の資源・財源を私物化する独裁政権の存在、デモを起こす市民への無差別な暴力……複合的な原因から、同時進行する様々な紛争に、国民たちは嘆いてきた。

そんな中でも、M さんは若者たちの可能性を信じ、若者の政治参画を促す青年協会を設立した。協会のメンバーとして様々な活動を行なった彼だが、その後政治的動乱に巻き込まれて、迫害の脅威にさらされ、国を逃れざるを得なくなった。逃れた先の日本でも、ずっと母国の未来や、ともに活動をしていた仲間のことを思っていた。M さんは、スマートフォンやパソコンでニュースをチェックしたり、SNS で仲間の安否を確認していた。

「難民になった時間を無駄にしたくない。ただ 逃げてきたのではない」

彼は繰り返し繰り返し私たちに伝えてくれていた。

医療に従事する仕事

「母国の未来のために、私ができることは何だろう？」
彼が出した結論は「医療による貢献」だった。母国には優秀な専門医がたくさんいるが、彼らの高度な技術を習得する機会や他国の医師と関わる機会は限られていた。そんな彼の想いを受けた私たちは、彼の問いの答えを探すべく、まずは「医療に従事する仕事」の入り口を片っ端から探した。

病院で働く現役医師や国内の医療系大学院で教授として働く元難民認定申請者の話を聞く機会をいただいた。様々な人たちと出会う中で、医療関係の仕事に就くまでの途方もない道のりに狼狽することもあった。イエメン出身で、日本で医師を目指す方からいただいたアドバイスには現実をつきつけられた。

「日本語を漢字までマスターして、日本の医師免許を取得し医療現場に入るためには、最低 5 年はかかる。そのゴール感を見直した方が良いのではないか？」

違いは「言語」だけだった
医療現場で見えた可能性

対話の機会だけではなく、実際の医療現場の診察に同席する機会をいただいたこともあった。

2018 年 12 月。現役看護師の知り合いのご好意で、多忙を極める小児科医・婦人科の現場へ招待いただいた。医師が患者を診察する現場に立ち合い、院内の医療機器をみて回った。本当にありがたいことに、婦人科では帝王切開の現場を見させていただいた。

M さんは、当時を振り返り、こう話す。
「これまでは “ 日本で医師になるのは難しいよ ”“ 夢を変えた方がいいかもしれない ”、“ 日本の医療の職場はこうだよ ” と言われつつ、実際の現場は他の人の話から想像することしかできませんでした」

「しかし、この経験は私にある気づきをもたらしてくれました。日本の病院で行われていることは、私の母国で行われていることと同じであり、唯一の違いは “ 言語 ” だけであることに気づいたのです」

他の人から話を聞くだけではなく、またインターネットで調べるだけでなく、現場に足を運んだことで、初めて自分が医療現場で働く具体的なイメージをもつことができた。その気づきが、多くの人たちから途方もないと言われていた、医療従事者として働くことへの希望の光となった。

医師から「公衆衛生」の道へ
志を共にする “ 同志 ” との出会いを経て、
彼は突き進んだ

多くの医師からアドバイスを受けたのは、「医師」ではなく、「公衆衛生」のスペシャリストへの道だった。医師として医療現場で個別の患者と向き合うことだけでなく、より多くの人たちやコミュニティに対して医療知識を使った貢献ができることに心を惹かれた M さん。そんな彼の進路に大きな影響を与える出会いがあった。

2019 年 3 月。代表渡部が神奈川県主催のシンポジウムで登壇した際に、神奈川県副知事である首藤 健治氏が参加をしており私たちの活動に興味を持ってくださった。「WELgee の活動をぜひ詳しく知りたい。自分も元医者だった。アフリカの医療に携わりたいと思ったのが、医者になったきっかけだった」と私たちに伝えてくださった。M さんは、首藤さんをはじめ、神奈川県職員の皆様とお話をする機会を複数回いただき、母国の医療の現場や、日本で成し遂げたいビジョンを語った。

その出会いから、ヘルスイノベーションに特化した神奈川県立の社会人大学院の存在を知った M さんは、公衆衛生を学ぶために、大学院に進学することを決意した。
まずは日本語を学ぶこと、入試のための英語の勉強や面接の対策、さらに入学のための費用を得ること。具体的な目標が見えた M さんは、迷わず行動を始めた。

彼の進学までには、本当に多くの人たちの支えがあった。家を探す期間中に住まわせてくれた人、日本語教室に通うための費用をサポートしてくれたボランティアの人。大学院設立に携わった人からの多大なるご助言やお力添え。彼の入学費を援助してくれた人。推薦書や様々な相談に乗った WELgee のプロボノ。目指すべき道筋を明確にしてくれた数々の機会、彼の医療に対するパッション、そしてそのパッションを支えてくれた人たちの協力。これら全てのおかげで、2020 年 3 月にヘルスイノベーションスクールに合格した。

コンゴ民主共和国と日本の架け橋になりたい

現在、昼は病院に勤務し、夜は大学院生として多忙を極める M さん。そんな彼がこれから成し遂げたいビジョンを聞いた。
「私の国には、優秀な医療従事者がたくさんいます。しかしながら、日本のように科学や技術を学ぶ機会が非常に限られています。もしも私が日本で最新の科学や技術を学び、私たちの国の未発達な部分に活かすことができたら。もしも、志ある母国の医師の卵たちが、日本の最新の医療現場に足を運ぶことができたら、と考えています」

彼は語り続けてきたビジョンを着実に形にしてきた。彼の言葉通り、現在勤務する総合病院の職員と共に、日本と母国の医療関係者をつなぐ団体の設立を行っている。

「今、私は仕事があり、ビザを変更するプロセスにいて、大学で勉強している。そして、自分の団体を立ち上げようとしている。一言で言うと、“Dream came true”（夢がかなった）だよ 」
母国を想い続け、様々な障壁にぶつかりながらも、諦めずに前に進み続けている。
私たちは彼と今後どんな未来を築くことができるだろうか。

Work WITH　Live WITH　Talk WITH

就労伴走事業 Job-Matching Program

山本 菜奈

坂下 裕基

武居 裕介

日本に逃れた難民の育成・採用・定着の一貫した伴走を行い、それぞれの能力と経験を活かして、企業のダイバーシティ・グローバル化の推進に貢献する人材を紹介するサービス「JobCopass」を運営しています。社会での活躍のみならず、法的地位の安定化を実現することで、政府による難民認定のみに頼らない、企業と連携による“オルタナティブパス”を実現します。

2019年度の成果

- 採用に関心を持っていただいた企業数 …… 53社
- JobCopassへの求職者（難民認定申請者）の新規登録者数 …… 20名
- 伴走した求職者の数 …… 30名
- 求職者との面談数 …… 120回
- 企業と求職者との面談の数 …… 13回
- お試し雇用成立 …… 2件
- 雇用成立 …… 2件
- 在留資格変更 …… 1件

総括コメント

着想から3年、2020年2月に正式に「JobCopass」としてサービスをリリースいたしました。運営体制としても2017年9月の事業構想時から参画していた山本に加え、2018年5月頃から携わってきた坂下と、キャリアコンサルタントの国家資格をもち外国人材のマッチング経験も豊富な武居が2020年1月にパートタイム職員として加わったことで、求職者・求人企業の双方への丁寧な伴走が可能となりました。

多くの難民申請者にとって、就労先はいわゆる3K労働や肉体労働を中心に非常に限られたものとなっています。対して、「JobCopass」は自身のスキルや経験、志を活かせる職種を重視したマッチングを行い法的地位の安定化を目指す、日本で唯一のサービスです。そのため難民認定申請者の間で口コミが広がり、現在も新規の流入が増えています。採用されて働きはじめた人材の生活は、大きく変化しています。本業の傍らで母国の人々向けのWEBサービスを立ち上げたり、異国の地で自社事業の拡大に奔走したりと、それぞれが自分らしく挑戦し、成長し、応援される、活き活きとした姿が見られるようになりました。

パートナーからの声（JobCopassを通じて就職されたSさん）

元々、自分のモットーは「人生から何を得られるかではなく、人生で何に成り得るかが大事」というもので、給料ではなく自己成長に重きを置いていました。JobCopassを通じた転職に挑戦しようと思ったのは、新たな世界が広がっているという確信があったり、ヤマハ発動機（株）で自分がどう成長できるかに興味があったからです。母国で6歳から商売に携わり、中国でも事業を経営してきた自分ですが、当時は起業家として個人で奮闘していました。いまは、新しい環境、新しい人々のなかで、周囲から学ぶ機会がたくさんあることが嬉しいです。今の仕事は、新規事業開発という新たな分野ですが、自分のコミュニケーション力や対人スキルといった強みを活かせていると思います。新しい事業を市場で広げていくためには、パートナーシップが不可欠です。多様な人々の疑問に答え、交渉し、提案していくことで、信頼を得ていきます。いまの部長は、私の中にその強みを見出し、「アグレッシブでいい！」と活躍を信じてくれました。今携わっている事業は、まだゼロイチの難しいフェーズですが、アフリカでシームレスなデリバリー事業を拡大することは、現地の住所制度の問題や売買における信用の問題に挑むエコシステムをつくることにつながります。そうして人々の生活に貢献する事業であるというのが、最も興味深いポイントです。WELgeeにおいて、自分の戦いはまだ続いています。私たちの道のりは、山あり谷ありだからこそ、常に目指すゴールを捉え続けていくことが大事だと思っています。

エピソード

CASE 01 JobCopassリリース！！！

「JobCopass」という名称をつけるにあたり、2度の合宿を開き、私たちがサービスの中で大事にしたい価値観や、求職者と企業の双方に対して願う進化を、スタッフ間でとことん話し合いました。そうして生まれた「JobCopass」という名称には、「Job（仕事）」を通じて、「Co-（ともに）」、未来への「pass（切符）」を手に入れる、という意味を込めました。

難民の仲間や企業の方々が、この新たな名称を使ってくださる一瞬一瞬に喜びを感じます。初めて面談する難民の若者が「JobCopassはまさに日本で僕が求めていたチャンスだ」と目を輝かせたり、企業の方が「社内で新しいグローバルチームの発足するので、JobCopassなら尖った人材と出会えるかもしれないと思った」と連絡をくださったり、その度に統括山本が小躍りしています。

CASE 02 （株）大川印刷での採用事例

SDGsを経営戦略に組みこみ、革新的なブランディングで注目される老舗企業で、難民認定申請者の方の採用が実現した。経営者の大川さんはビジョンにあふれている方ですが、現場の社員の中には突然アフガニスタンの人が同僚になると言われ、「なぜ日本語に慣れていない外国人を？」と戸惑う方もいたそうです。

そのようななか、社長はいかに彼を採用することが会社にとって意義のあることなのかを、折に触れて社内に向けて発信されました。2019年12月アフガニスタンで医師として活動されていた中村哲さんが亡くなられたときは、難民の方が朝礼の場で、アフガニスタン人の目線で追悼の言葉を述べました。このような根気強い働きかけもあって、社内の英語学習プログラムに立候補する社員の方が増えるなど、徐々に社内での理解が得られてきています。JobCopassでは、人材と企業のマッチングをして終わりではなく、多様な人材が参画するからこその真価を発揮できるよう、長い時間をかけて定着のサポートをしています。

CASE 03 経済同友会と一流塾

JobCopassと難民採用の事例を、グローバル人材の獲得やSDGsに対するユニークな切り口として紹介させていただく勉強会や取材などの機会が増えたことで、新たな採用の手法として関心を持ってくださる企業の方との出会いも増えました。特に経済同友会や一流塾といった、全国各地の想いある経営者が加盟するプラットホームで、「『難民』と呼ばれるグローバル人材〜日本と世界の架け橋となる人材の活かし方〜」というテーマで講演をさせていただいたことは、私たちにとっても非常に学びの多い機会になりました。経営者や企業幹部の方々が見据える未来の企業のあり方や、企業が現状抱えている葛藤などを肌感覚で知ることで、より企業の目線に沿って、難民人材の強みを伝えられるきっかけとなりました。同時に企業の方々から「日本にいる自分たちも、本業を通じて、難民問題の解決に寄与できることを初めて知った」という声もいただき、心強いパートナーが増える機会にもなっています。

Work WITH　Live WITH　Talk WITH

Tech-Up事業　Tech-Up Program

島倉 愛理

Tech-Up は、これまで「被支援者」としてしか見られず、最低限生きていける状態以外を望むことが難しかった「難民」の若者が、テクノロジーを味方に未来の日本社会、そして世界へと価値を創造することを目指し挑戦するスキルトレーニングプログラムです。プロのエンジニアとともに IT スキル修得の機会を学習者に提供し、彼らのキャリアの実現に伴走をしています。

■ 2019 年度の成果

・（株）DIVE INTO CODE とのパートナーシップ開始
・「Rakuten Social Accelerator」第 2 期採択（難民の採用に関する市場調査の実施 / 学習コンテンツの拡充）

■ 総括コメント

Tech-Up の構想は、コンピュータが好きで未来への挑戦に闘志を燃やす 1 人の難民の青年と、やる気とガッツのあるエンジニアを育てたいと想う IT スタートアップの社長さんが出会ったところから始まりました。2018 年度は難民の若者 5 名がプロトタイプの学習に参加し、うち 1 名が学習をやり切りパートナー企業さまでのお試し雇用を始めましたが、他の受講生は様々な理由から修了できませんでした。この結果を経て、事業として持続的に価値を生み出す仕組み作りの必要性を感じたことから、2019 年度は、難民認定申請者だけでなく日本社会のニーズも汲み取ったスキルトレーニングプログラムづくりに注力することとしました。その中でたくさんのご縁をいただきながら、多様な方々とのパートナーシップが実現し着実な前進をすることができました。これまで自分たちの中で組み立ててきた仮説をゼロから見つめ直し、Tech-Up の存在意義を問い直すプロセスを経て、本当に私たちが作りたい未来とそのために社会に仕掛ける仕組みを描くことができました。Tech-Up ではいわゆる「難民問題」の解決だけではなく、IT 人材の不足という日本の課題を同時に解決できるような仕組みを生み出したいと考えています。さらに将来的には、日本で活躍する IT 人材を輩出するコミュニティ、さらには彼らの母国や世界における平和構築を担うチェンジメーカーのプラットフォームとなることを目指します。意欲ある若者が今日明日を生きるためだけの生活から抜け出し、未来の自分のために全力で挑戦できる環境、その挑戦を応援し合える仕組みを私たちの想いに共感してくださる皆さんと一緒に作っていきたいと思います。

■ パートナーからの声

野呂 浩良さん　（株）DIVE INTO CODE 代表取締役

DIVE INTO CODE では、「国境や年齢などの属性に関係なくすべての人がテクノロジーを武器にして活躍できる社会をつくること」を最終目標にしています。Tech-Up への教材提供を通して、逆境にある難民の方々へチャンスをつかめる場を提供してまいります。

佐藤 隆さん　NTT テクノクロス（株）

20 年以上ソフトウェア開発をしておりますが、このたびメンターとして、学習意識の高いスカラーの方々に、プログラミングを伝授することになりました。単にプログラミング言語を覚えるだけでなく、コンピュータサイエンスの基本を理解して効率の良いコードを書く方法や、業としてコードを書くための様々な慣習やノウハウをお伝えできればと考えております。

Work WITH　Live WITH　Talk WITH

TOKIWA事業・千葉ハウス事業　TOKIWA Program・Chiba House Program

TOKIWA事業

（一社）日本ルーテル社団から管理を受託した、東京都板橋区のシェアハウス「TOKIWA」における事業です。WELgee のスタッフともに暮らしながら、企業での就職を目指す難民認定申請者のアクセラレーションや、住居をもたない難民認定申請者の緊急的な受け入れを行いました。2019 年 4 月から 12 月まで実施。

千葉ハウス事業

クラウドファンディングにて購入した千葉県大網白里市の空き家で、スタッフと難民認定申請者がともに生活を営むシェアハウスを運営しました。多くのボランティア・プロボノが参加した家屋の DIY プロジェクト、（特非）NICE（日本国際ワークキャンプセンター）との共催による難民ワークキャンプ、地域の方々との交流・連携などを行いました。2018 年 6 月から 2019 年 12 月まで実施。

■ 2019 年度の成果

TOKIWA事業

・稼働日数 …… 268 日
・滞在人数 …… 6 名

千葉ハウス事業

・稼働日数 …… 365 日
・滞在人数 …… 3 名
・難民ワークキャンプを 2 回実施し、14 名が参加

■ 総括コメント

Live WITH では、地域社会のアクターとの協働に注力をしてきました。どちらの家にも都内や遠方からも様々な訪問者・応援者が訪れ、入居者と交流する多くの機会がありました。日本での一歩を踏み出す期間を、多くの方が支えてくださいました。

しかし、WELgee 全体のビジョンを実現するより効果的な方法として、経済界とのパートナーシップの構築を優先的に行っていくために、「ともに暮らす（Live WITH）の事業の幕を一旦閉じることにしました。

それにあたり、2019 年 11 月に、これまで事業を支えてくださった様々な協働者の方々と、過去の住人たちとともに、Live WITH 終了報告会を実施し、対話形式で 3 年間の軌跡を振り返りました。

■ パートナーからの声

A さん　（Live WITH 終了報告会参加者）

Live with は無くなってしまうけど、WELgee ならではの魅力的な距離感やコミュニケーションを大事にしてほしい。

B さん　（Live WITH 終了報告会参加者）

良いトライをしながらも、リソースに対して少し拡大しすぎと感じていた。今回の決定は現実的で良い選択だと感じた。

Activity Reports

セミナー事業 Seminar Program

玉利ドーラ

セミナー事業部は企業の研修と講演を通じて、遠く離れた世界の課題だと捉えられがちな難民のテーマを、より多くの人たちの日常に近づけてきました。難民の背景を持つ講師「アンバサダー」たちが自らのライフストーリーを伝え、日本に住んでいる人たちの意識や価値観の変容をもたらします。

2019 年度の成果

- 実施した講演・研修合計数 …… 68 件
- 実施した講演の数 …… 42 件
- 実施した研修の数 …… 26 件
- 研修・講演参加者 …… 4729 名
- これまで研修を実施した企業の数 …… 41 社
- これまで講演を実施した教育機関の数 …… 24 校
- 研修・講演に参加した難民当事者の人数 …… 21 名
- 講演・研修後成立した企業との協働 …… 2 件

総括コメント

2019 年度、セミナー事業部では教育機関や自治体、企業に対して 68 件の講演・研修を届け、約 5,000 名の方々にご参加いただきました。

「難民の若者が日本のビジネスパーソンに出会うことで、日本企業で働くことを具体的にイメージできるようになり、日本の社員や企業にとっては刺激とモチベーションをもらう機会になるかもしれない」という仮説から始動したセミナー事業部では、事業創造のために研修のコンテンツ設計から、オペレーションの構築、アンバサダーの表現力を磨くプログラムの実施など、多岐にわたる業務を行なってきました。講演・研修の参加者は、単に難民の存在を身近に感じるだけではなく、母国で『女性だから』という理由で歌うことが許されなかったアンバサダーや、国のために政治を変えようとしてきたアンバサダーたちの生き様を聞くことで、改めて自分らしさとは何かを考えはじめ、講演・研修終了後には主体的に新たな活動を始める方もいました。

一方アンバサダーたちの中にも、自らのライフストーリーを語ることによって、これまで恥じていた難民としてのアイデンティティに自信を持つようになる方が増えました。さらに、普段出会う機会が少ない日本人たちと深く関わることによって、日本人の多様さに気づいたアンバサダーもいました。セミナー事業部では、講演・研修を通じてアンバサダーと日本人参加者の双方が、自分らしく社会で生きれるようなマインドを醸成してゆきます。

パートナーからの声

佐藤 将さん　(株)ジェイフィール

アンバサダーのストーリーテリングは参加者の認識の深いレベルに変化を起こすことができるほどインパクトが強い。WELgee の研修は「認識の変化」をもたらすことができ、その点でとても価値があると思います。

研修参加者

ニュースや本からでは得られない本物の情報に触れることができ、またそれについて企業という立場からどんなことができるかと考えるという、今までにない体験をすることができました。

講習参加者

WELgee は難民支援ではなく、難民の方々へ様々な選択肢を提供しようという取り組みを行なっていることに感銘を受け共感しました。一方的な情報提供でなく、対話型の講演であり、自身の考えを深められるとともに、主体的に参加できました。ありがとうございました。

エピソード

CASE 01　コニカミノルタ（株）での研修

WELgee は、2019 年 9 月から 12 月まで開催されたコニカミノルタ(株)の社員研修「アクセス」(詳しくは 16P へ)に、テーマオーナー・講師として参画しました。「アクセス」の対象者は、19 名の社員の方々。参加者たちは 3 ヶ月間かけて「来日した難民の方々が、自らの可能性を最大限発揮するための新しい仕組みを提案せよ」という課題に取り組みました。普段の業務とは程遠い日本の難民の現状について積極的に調査に取り組み、難民の方に寄り添った提案に磨きをかけました。WELgee からの 3 回のフィードバックを経て発表された提案の中には、「難民人材紹介に特化したキャリアコンサルタントを増やす仕組み」「お寺で WELgee サロン」などユニークなものが並びます。研修初期には難民の人とどう向き合えばいいのかと不安の声も多数ありましたが、交流パーティーではアフリカと中東の音楽と共に、難民当事者と一緒に笑いながら踊り距離を縮めました。最初は「彼ら」という主語を用いて語っていた社員の方々が、終わりごろには難民問題を自分事化して「私たち」という主語を用いるようになっていたことが印象的でした。

CASE 02　講演の広がり

2019 年度は、企業や教育機関だけではなく、新任の国家公務員や司法修習生など、より幅広い方に向けてお話をさせていただきました。
また、国際平和映画祭や中央大学アフリカ映画祭での世界の社会課題を身近に届けるセッション、(特非)GEWEL オープンフォーラムでの、複雑な背景を持っている外国人と働くことに関するパネルディスカッション、島根県雲南市の(特非)おっちラボと協働で実施した地域活性化をアンバサダーと共に考える講演など、様々な機会に恵まれました。
社会のあり方や多様な人たちの活かし方についてともに考えるパートナーの増えた 1 年になりました。

CASE 03　アンバサダーに起こる価値観や世界観の変化

研修や講演で講師を務めるアンバサダーは、日本の人たちの価値観に変容をもたらしながら、自分自身も変化の一歩も踏み出しています。ここでは、研修・講演に参加した 2 名のアンバサダーを紹介します。

キャシーさん(東アフリカ出身、女性)
研修の参加者と共に自身の夢やその実現に向けたアクションについて対話したのち、参加者に向けて照れくさそうに語ってくれました。「今まで日本の人たちとのつながりをあまり感じられなかったのですが、今日みなさんと出会って、この社会にも私たちのことを応援してくれる人たちがいると分かりました」

ザラさん(中東出身、女性)
子供のころからの夢は歌手になることなのに生まれ故郷では女性が公共の場で歌うことは禁止されていて、隠れて歌で心を癒すしかありませんでした。研修や講演で自身のライフストーリーを共有したのち、「夢が叶っているように感じるの」と語り、毎回歌で参加者を楽しませてくれます。

Work WITH　Live WITH　Talk WITH

サロン事業 Salon Program

「難民」という言葉の先のユニークな個性と出会う場として、異なる価値観をもつ人々が双方向な対話を行う「WELgeeサロン」を、大学生を中心とするユースチームが月に１度企画・運営しています。私たちは、異なる価値観や、強い信念をもつ多国籍な仲間として、サロンに参加する難民当事者のことを「Internationals（インターナショナルズ）」と呼んでいます。

■ 2019年度の成果

- イベント開催 …… 15件
- WELgee サロン開催 …… 9回
- 参加者 …… 380名
- ミニサロン開催 …… 6回

■ 総括コメント

2019年度、サロン事業部では累計15回のイベントを開催しました。初期のWELgeeサロンでは「難民」について一方的に学ぶ機会が多かったですが、数を重ねるごとに、インターナショナルズの持つ多様性に光を当てるテーマや、参加者が積極的にコミュニケーションを行う双方向的な内容のイベントが増えました。さらに、インターナショナルズ自身のやりたいことを実現したり、彼らの特技を活かしたりすることのできる場として、ミニサロンをはじめました。その結果として、累計で380名の方々に対して、「難民」という言葉の先のユニークな個性との出会いを提供しました。
毎月のWELgeeサロンの内容を担当する「企画チーム」の多くのメンバーは、過去のWELgeeサロンに実際に参加してくれた方々です。学生だけでなく、様々なバックグラウンドを持つ方が積極的に運営に携わることにより、企画に多様性が生まれました。

■ パートナーからの声

Aさん　企画チーム学生ボランティア
ハッシャダイカフェで開催したサロンが一番印象に残っています。インターナショナルズに司会をお願いし、アフリカ料理を参加者と一緒に食べるなど、WELgeeが大事にしている「WITHの精神」を意識できたイベントとなりました。

Bさん　企画チーム学生ボランティア
企画チームの魅力は、ひとりひとりの弱みも認め合いながら、各々の強みを発揮したチーム力だと感じています。
多様なメンバーとサロンを作り上げる過程で、価値観の広がりやチーム形成など多くのことを学んでいます。

WELgeeサロン VOL.29 参加者
今まで難民が日本にいることは知っていても、どんな人達で、彼らがどのように日本で暮らしているのかわからなかったが、実際に今日、彼らに会って話して、抱えている問題、私たちにできることはなにか考えることができた。

WELgeeサロン VOL.30 参加者
このサロンはいい意味ですごく軽くてよいと思いました。
まずはお互いが関わって、理解しようとすること。そのきっかけを作れるこのサロンはとてもすてきだと思います。

Team WELgee

コアメンバーであるスタッフを紹介します。

フルタイム職員
代表理事・代表
渡部 カンコロンゴ清花

フルタイム職員
理事・戦略室長
安齋 耀太

フルタイム職員
就労伴走事業部統括
山本 菜奈

フルタイム職員
PR部統括
林 将平

フルタイム職員
New Member
リソース部門統括
渡辺 早希

フルタイム職員
New Member
セミナー事業部統括
玉利ドーラ

パートタイム職員
New Member
Tech-Up事業部統括
島倉 愛理

パートタイム職員
就労伴走事業部
キャリアコーディネーター
坂下 裕基

パートタイム職員
New Member
就労伴走事業部
キャリアコーディネーター
武居 裕介

監事
New Member
株式会社グロービス
東樹 敏明

監事
New Member
株式会社グロービス
井上 智映子

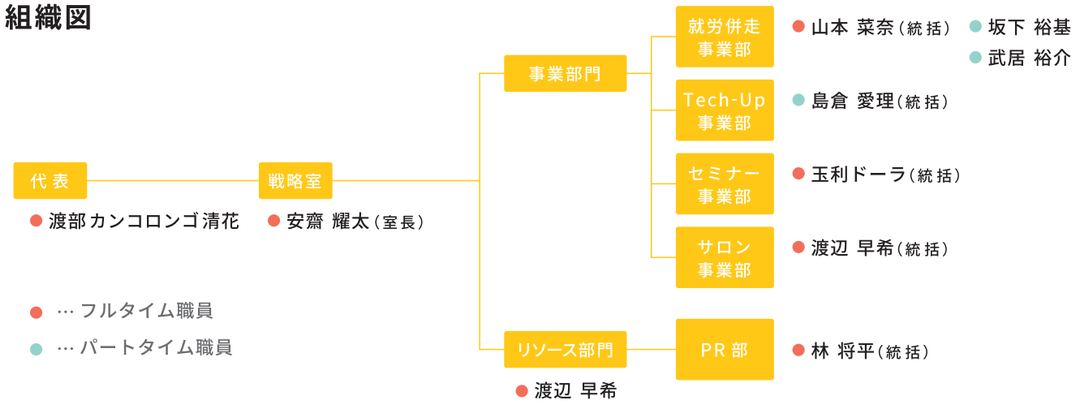
顧問
顧問弁護士
小野田 峻

顧問
顧問行政書士
長岡 由剛

インターン・プロボノを
随時募集中！

私たちと一緒に、誰もが自らの境遇を乗り越えて
未来を築ける社会を作りませんか？
最新の求人情報は、以下よりご確認ください！

■ 組織図



2020年10月16日現在

寄付をいただいた方々のご紹介

2019 年度には 5 つの団体と 20 名の個人より単発での寄付を、133 名の個人より継続的な寄付をいただきました。
皆様からいただいた寄付は、難民申請者ひとりひとりへの長期的な伴走のための運営費やその他の活動資金に使わせていただきました。

● 法人

Swiss Re Foundation	三菱マテリアル	the japan times	FIT for charity
peace day 2020	KONICA MINOLTA	kinko's On Demand Solutions	株式会社 チェリオ コーポレーション
エムエフジー & ミッション 株式会社	フェアトレード カンパニー 株式会社	Sansan 株式会社	

● 個人の方々
森川博己 様、太田晃 様、坂根 宏治 様、和田 貴子 様、柴田 励司 様をはじめ、153 名の方々よりご寄付をいただきました。

1日30円～

WELgee ファミリーになって
難民の若者たちに未来の投資をしませんか！

紛争・差別・迫害などから逃れ日本にやってくる「難民」と呼ばれる人たちがいます。

希望をかけて逃れてきた先の日本でも追い込まれ「自分は役に立たない人間だ」と
可能性を閉ざしている人たちがいるのが現状です。実は彼らは将来的な故郷の担い手たちなのです。

そんな若者たちの直面する壁を崩し、未来に投資するマンスリーサポーターになりませんか？

Thank you for sponsoring us

協働事例のご紹介

KONICA MINOLTA　KOKKARA

2019 年 9 月から 12 月まで、（同）こっからと共同で、コニカミノルタ（株）の研修「アクセス」を実施しました。「アクセス」とは、次世代リーダー育成を目標とした、実践型社員育成プログラムです。19 名の社員が参加し「来日した難民の方々が、自らの可能性を最大限発揮するための新しい仕組みを提案せよ」というテーマに取り組みました。また、WELgee の発行する漫画を 1800 部印刷していただきました。さらに、研修中にご提案をいただいたプランが実現し、難民認定申請者の方に社内見学の機会をいただきました。参加した難民申請者の方は、同社の外国人社員との対話を通じて、日本企業で働く姿勢や、職場のリアルな声を学ぶことができたようです。

SOCIAL ACCELERATOR Powered by Rakuten

Tech-Up 事業（→詳しくは 9P へ）が、楽天（株）の「Rakuten Social Accelerator」に参加しました。これは、楽天のテクノロジーやビジネスアセットを活用し、社会課題解決に取り組む団体を支援するアクセラレータープログラムです。楽天従業員 11 名のプロボノにより、難民採用の調査、事業構想、受講者（スカラー）のモチベーション向上施策、スカラーのペルソナの設定などを実施しました。

DIVE INTO CODE

2019 年 7 月より、Tech-Up 事業において受講者（スカラー）が受講する学習コンテンツを、（株）DIVE INTO CODE より無償で提供をいただいております。これまでに 8 名が受講し、プログラミングの体系的な学習機会をいただきました。

kinko's On Demand Solutions

次世代リーダー育成プロジェクト「アクセス」の実施後、キンコーズ・ジャパン株式会社様に、WELgee が発行する漫画「難しい民って何だ ?」を無料で 1800 部印刷していただきました。

salesforce

WELgeeでは、組織活動全体のミッションの実現度を可視化し、評価をするために、社会的インパクト評価の導入を行っております（→詳しくは P17へ）。そのマネジメントツールとして、Salesforceの導入を進めています。導入にあたり、（株）セールスフォース・ドットコムのプロボノの方々に伴走していただいております。（株）セールスフォース・ドットコム様のランチ勉強会にて、WELgeeの取り組みについてご紹介する機会をいただいたことが、プロボノとして有志の社員の皆さんが参画してくださるきっかけとなりました。

CROSS FIELDS

2018 年 11 月から 2019 年 4 月にかけて、NPO 法人クロスフィールズの実施する、様々な社会課題解決に取り組む NPO や社会的企業の経営支援に企業のエグゼクティブが参画するプログラム「Executives For Change」に参加しました。
ヤマハ発動機（株）の白石章二さんが、セミナー事業の開発のに 5 ヶ月間伴走してくださいました。また、ここでの出会いが、ヤマハ発動機（株）での難民人材の採用につながりました（→詳しくは P7 へ）。

SVP TOKYO

2019 年 9 月に、（特非）ソーシャルベンチャー・パートナーズ東京の投資協働先に選定されました。約 2 年の間、経営基盤の強化のために、多様な専門性を持つプロボノの皆さんに伴走いただきます。協働内容として、ビジョンを最速・最適に実現するための全社戦略策定や、全社戦略に紐づく包括的な事業マネジメント、最終的に目指すアドボカシーに向けた道筋作りを行っています。

そのほかの協働事例

- （特非）ETIC.
- （一社）日本福音ルーテル社団
- （株）ハッシャダイ など

Examples of collaboration

2019年度　活動計算書　（2019年4月1日から2020年3月31日まで）

	科目			金額（単位：円）	小計・合計（単位：円）
A 経常収益	1 受取会費		正会員受取会費	55,000	
			賛助会員受取会費	2,159,500	
	2 受取寄附金		受取寄附金	4,520,397	
	3 受取助成金等		受取民間助成金	852,804	
	4 事業収益		統合事業	5,486,958	
			啓発事業	7,059,248	
			その他	206,588	
	5 その他の収益		統合事業売上高	56,000	
	経常収益　計				20,396,495
B 経常費用	1 事業費	（1）人件費	給料手当	3,851,000	
			法定福利費	181,890	
		（1）人件費集　計			4,032,890
		（2）その他経費	福利厚生費	19,400	
			業務委託費	49,400	
			謝金	48,620	
			印刷製本費	36,607	
			会議費	97,108	
			交際費	8,160	
			旅費交通費	1,484,601	
			通信運搬費	16,828	
			消耗品費	81,342	
			水道光熱費	83,927	
			賃借料	240,320	
			保険料	92,200	
			諸会費	8,000	
			租税公課	4,450	
			支払手数料	17,440	
			雑費	265,684	
			広告宣伝費	2,233	
			減価償却費	130,111	
		（2）その他経費　計			2,686,431
		1 事業費　計			6,719,321
	2 管理費	（1）人件費	給料手当	5,440,000	
			法定福利費	402,193	
			通勤費	355,750	
			福利厚生費	300,000	
		（1）人件費　計			6,497,943
		（2）その他経費	業務委託費	472,390	
			謝金	15,000	
			印刷製本費	37,563	
			会議費	32,998	
			旅費交通費	591,396	
			通信運搬費	1,464,232	
			消耗品費	81,132	
			諸会費	61,000	
			租税公課	7,200	
			支払手数料	49,939	
			新聞図書費	17,842	
			支払報酬料	714,435	
			広告宣伝費	409,046	
			雑費	124,204	
		（2）その他経費　計			4,078,377
		2 管理費　計			10,576,320
	経常収益　計				17,295,641
	当期経常増減額（A－B）…①				3,100,854
C	経常外収益	経常外収益　計			0
D	経常外費用	経常外費用　計			0
	当期経常外増減額（C－D）…②				0
	税引前当期正味財産増減額　①＋②…③				0
		法人税・住民税及び事業税…④			140,000
		前期繰越正味財産額…⑤			5,543,471
	次期繰越正味財産額（③－④＋⑤）				8,504,325

2019年度　貸借対照表　（2019年4月1日から2020年3月31日まで）

		科目			金額（単位：円）	小計・合計（単位：円）
A 資産の部	1 流動資産			現金預金	5,178,599	
				未収金	4,208,239	
			1 流動資産　計…①			9,386,838
	2 固定資産		（1）有形固定資産	建物	260,222	
				土地	1,079,556	
			2 固定資産合計　計…②			1,339,778
	資産　計　①＋②					10,726,616
B 負債及び正味財産	B-1 負債の部	1 流動負債		短期借入金	271,382	
				未払金	1,738,682	
				未払法人税等	70,000	9,386,838
				預り金	142,227	
					1,079,556	
			1 流動負債合計　計…③			2,222,291
		2 固定負債			0	
			2 固定負債合計　計…④			0
			負債　計　③＋④			2,222,291
	B-2 正味財産の部			前期繰越正味財産額	5,543,471	
				当期正味財産増減額	2,960,854	
			正味財産　計　③＋④			8,504,325
	負債及び正味財産　計　（B－1）＋（B－2）					10,726,616

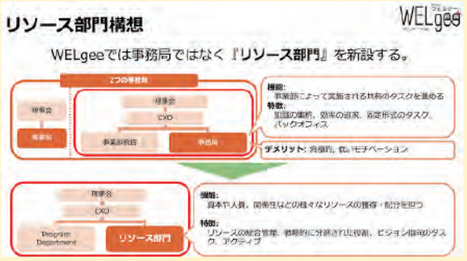
2020年度のWELgee

1 ルールメイキングの本格始動

ルールメイキングとは、社会的なイノベーションを起こすために、そのボトルネックとなっている既存の法制度を乗り越え、適切な法制度を創造していくことを意味しています。
WELgeeでは、日本に逃れた難民たちが「難民認定」のみに頼るのではなく、高度外国人材として活躍することで、彼らの法的地位の安定と、日本社会にイノベーションを起こすことを目指しています。そのために、難民申請者が様々な方法で、日本社会で活躍できるルールメイキングも目指しています。

2 ソーシャル・インパクト・マネジメントの導入

ソーシャル・インパクト・マネジメント（以下、SIM）とは、組織活動により得られた社会的な効果や価値を可視化し、社会的なインパクトの向上を目指すマネジメントのことです。組織活動によってもたらされる様々なインパクト（人の行動変容や、日本社会の課題解決等）を可視化することで、その活動がどれくらいミッションに寄与しているのかを見ることができ、より効果的な事業・組織運営が可能となります。戦略室では1月よりSIMの導入を開始し数多くのプロボノの方々とともに、SIMの要であるロジックモデルを構築しています。

3 リソース部門強化

リソース部門とは、事業や組織活動の基盤となるようなヒト・モノ・カネ・リレーションズ（外部のステークホルダーとの関係性）を組織のビジョン・ミッションの達成に向けて、戦略的にマネジメントし、組織活動の最大化を図るための部署です。2020年春より、専属の職員を配置し、経理業務体制の強化、組織内コミュニケーションの在り方の見直し、働く環境の整備に向けた制度設計を行っています。自分たちのつくりたい社会と、その社会の一員である一人ひとりの人生に寄り添った組織づくりを目指します。